



Title	西欧婦人衣裳における裁断史の研究 : 仕立師と裁断
Author(s)	大江, 迪子
Citation	デザイン理論. 1992, 31, p. 86-87
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53004
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

西欧婦人衣裳における裁断史の研究 一 仕立師と裁断一

大江迪子

衣裳の形態を裁断史の見地より見た場合、その変遷は社会的背景が大きくかわりあっている。衣服の形態をとらえるためには、衣服を製作する仕立師が、如何にして技術を修得し、裁断、構成、縫製を行なったか、そして技術がどのように伝授されたかを、世界最初のスペインの裁断書であるアルセガの著書から分析する。

また、十二世紀半ば、ハンブルク市の衣裳仕立屋の同業組合が結成されてから以降、どういう過程を経て仕立師として認められ確立されたかを明らかにする。

ハンブルク市では、欧州において、一番古い衣裳同業組合の勅許状が1152年に与えられた。そして、フランスでは十三世紀に同業組合が現われ、少し遅れて1318年、チェコ大国に初めて仕立屋の同業組合が許可された。

同業組合は、徒弟制度の条件や期間に関する規則を定めて一人の仕立職人が、その職業の達人になるまでの一定規律を定めた。

次に、女性の仕立師と男性の仕立師の規制がどのようなものであり、位置付けがどうであったか、女性仕立師が男性の仕立師と同様に認められるようになったのは、いつ頃かを考察する。また、どのような状態で作業がすすめられ、いかなる道具類が使用され、作業場はどうであったかをジョスト・アンマン (Josto Amman) の著書即ち“Ständebuch”として知られる「各種職業の本」から分析する。

さらに、スペインのマドリッドにおいて、

初めて“Libro de Geometria Practica y Traça” (実用製図構成法) の著書が発行されて、種々の布幅による裁断方法が、明確に表示された。

また、型紙を作るための採寸方法については、初期にはかなり大雑把であったことが型紙から察せられる。

アルセガによると「婦人用の絹のマントルを裁断する際の布地の見積もり方は、着用者の頭のうえから布地をかぶせ、必要な布地の長さを石けんでマークせよ」と教えている。そして、細かいところは、試着により補正して仕上げるように述べている。また、このマントルを基にすれば何枚ものマントルをも裁断することができると述べている。

十九世紀には、コリー (Cory) 夫人の“The Art of Dressmaking” (1849年出版) の中で、型紙を作る場合の第一段階としては、もし一番始めの型紙作りがわからなければ、古い服を解体して、ひとつひとつ分解する必要があると述べている。

型紙を起すには、身体の採寸が必要であると思われるが、採寸に必要な巻き尺は、十九世紀の始めまで発明されていなかった。それまでは、各々、お客の身体を採寸するには、ガーサルト (Garsault) 1769年出版の“L' Art du Tailleur”によると「紙片の端に目盛りを入れて印された。」と述べている。

同じような方法は、十六世紀にも行なわれたようだが、この時は紙の使用ではなく、

採寸用の羊皮紙と呼ばれるものを使用して、仕立師たちは、寸法を記入するというよりも、目盛りを付けた紙片をすべてのお客の為に残しておいたようである。

そして、十九世紀の初期においては、実物大の型紙が出版されるまでとなり、洋服の仕立専門の著書が種々多く出版されたことも明らかになった。

次に、十八世紀から十九世紀婦人衣裳の特徴と裁断、構成について考察する。

外観は前世紀より柔軟となり、人間として自然で自由な思考が、人々の豊かな土壌のなかで生まれ、やがてイギリスにおいては産業革命という目覚ましい成果として現われ、服飾の面でも新しい衣裳美を打ち出し、現代に向けて確固たる基盤を築いた。

十八世紀初期の衣裳の裁断法は、始めはT字型に裁断された簡単なネグリジェ型であった。しかし、ロココ時代を迎える頃には、ローブ・ヴォラント (robe volante: ひるがえるローブ) あるいはローブ・バタント (robe battante: パタパタと音がするローブ) と呼ばれる華麗で優雅な雰囲気醸し出す衣裳となり、裁断、構成の複雑な衣裳へと変化していった。

十八世紀半ば過ぎになるとイギリスに芽生えた産業革命が、服飾の美化に著しく影響をあたえ、機械化による新しい衣裳美は、自然尊重、庶民性、実用性に新しい価値観を見いだした。それまでの誇張美から自然な美しさへと一転した。

これらがもたらす衣裳は、ポロネーズ型に代表された。この衣裳は、スカートをたくしあげる特徴から名称をポロネーズ・アン・フラック (polonaise en frac: 燕尾服状のポロネーズ) やポロネーズ・オゼール

(polonaise aux ailes: 翼を付けたポロネーズ)、ポロネーズ・ア・コクリュッション (polonaise à coqueluchon: 頭巾つきのポロネーズ) など種々変化しながら着続けられた。これらの構成方法及びたくしあげの方法を考察する。

さらに、十九世紀に入って、ナポレオン勢力の弱体化に伴って旧貴族が頭をもたげ衣裳にも貴族調が再現するが、おりから古典調の厳しさに対抗して生まれた、ロマンチックの風調が高揚し、物質的なものより詩的なものへ、幻想的な世界に憧れ、十九世紀半頃クリノリンを用いたロマンチックな服装が流行する。この王政復古時代の衣裳は裁断、構成技術を現存する遺品 (1835年および、1837年) から複製を通じて考察を行なった。

ウエストは細く見せるよう工夫がなされ、袖は大きく誇張されたジゴ袖が特徴であった。また、今までになかったダーツの技法がとられて身体にそって、ぴったりしていることであった。

着装方法は、ベティコートを二枚付けてその上に腰当ての大小を重ねて、後腰に付けて、袖は、張りを出すためにダウンの入ったスリーブ・バンを付けたのちローブを着装した。

おおえ・みちこ 大谷女子短期大学
1992. 3. 21 第27回被服分科会